

# 都島だより

発行責任者  
**岩井 浩一**

〒343-0807  
埼玉県越谷市赤山町4-9-1 B-712  
TEL 048-964-3176



関東浪速工業会 会報 2007年(平成19年)5月 第35号

事務局 **馬江 治喜**

〒234-0056  
横浜市港南区野庭町696-6  
TEL045-841-8885  
E-mail umae2@m3.dion.ne.jp

題字デザイン **岡田宏三**

関東浪速工業会・現在会員数◆合計560名

◆M・機械117名、ME・機械電気23名 ◆A・建築101名 ◆E・電気・電子工学175名 ◆C・土木・都市工学53名 ◆C I・工業化学・理数59名 ◆L・普通12名 ◆工専20名

## 平成十九年度 関東浪速工業会会長ご挨拶



A38 岩井 浩一



本年一月に開催されました総会において本年度の会長に推挙、承認されました建築科38年卒業の岩井です。本年一年間よろしくご指導、ご協力をお願いいたします。関東支部におきましては、多彩な行事と毎年の総会、Mニュースの発行等、各科の幹事の熱心な努力と、会員の皆様のご協力によりつつがなく実施されておりますことは大変感謝いたしております。近年、新卒業生や若い方々の会員が少なくなる傾向で、各種行事の参加者が限定され、また高齢化し、会の活性化が求められております。本年から始まり、いわゆる「団塊の世代」の方々には直接手紙にて、定年後の社会参加の一環として母校の卒業生の交流の場であるこの親睦会が催す各種行事に同期生や先輩、後輩を誘い合い、ぜひ参加していただきますようお願いいたします。先日、母校創立100周年を期に浪速工業会東西合同懇親会が開催されました。総員53名の参加があり卒業年度、卒業学科に関わりなく母校の卒業生ということと和気藹々な一泊懇親会になりました。この会は会員の皆様のご協力で成り立っております。皆様の活発なご意見、ご指導により役員一同が興味の持てるような企画をいたしますので積極的な参画をお願いいたします。最後に、景気が回復しているとはいえ、まだまだ厳しい経済環境のなか、皆様およびご家族の方々の活躍とご健康をお祈りいたします。

## 納涼屋形船へのご案内

担当幹事 C33 松本 信行

今年は懇親会・見学会を兼ねた行事として、左記の要綱で「納涼屋形船」の会を企画致しました。振るつてご参加下さい。

### 納涼 企画



開催日時 8月9日(木) 18時00分出港し  
20時30分頃帰港予定

集合時間 17時30分(雨天決行)

集合場所 JR・モノレール 浜松町駅  
南口S5階段付近

参加費用 ￥10,500円

内容 集合場所から徒歩3分の屋形船・竹内より乗船し、夕日に映えるレインボーブリッジや東京湾臨海部のスカイラインを楽しみながらゆったりとしたひと時を過ごします。料理は、揚げ立て天麩羅・お刺身舟盛・サラダ・おにぎり等。参加費用の中にはビール・日本酒・焼酎・ジュース等の飲み放題が含まれています。なおご家族の方の参加も大歓迎です。

申込締切 8月2日(木)

申込方法 事務局・馬江まで。科、卒年、氏名、参加人数を電話、FAX又はEメールにてお申し込み下さい。  
TEL・FAX 045-841-8885  
Eメール umae2@m3.dion.ne.jp

多数のご参加を  
お待ちしております



## 東西合同懇親会に参加して

E36 馬江 治喜

今年は母校創立100周年の記念すべき年にあたり、記念事業の一環として東西合同懇親会が3月10、11日に愛知県蒲郡の三谷温泉で開催されました。関東支部では例年開催しています一泊懇親会をこの合同懇親会に兼ねるということで6名が参加しました。今回の参加者は本部から42名(公員33名、学校親和会、PTA9名)関東支部6名、中部支部5名の総数53名でした。懇親会の始めに澁谷理事長から挨拶があり、100周年記念行事への寄付金の集まりが芳しくなく、特に浪速工業会館立替工事への寄付金が少ない。既に寄付された方も含めて多くの方々に寄付していただくよう強く要請がありました。秋山校長からは後輩の活躍状況や進学、就職の状況等お話がありました。その後近江元科学技術庁長官の乾杯の音頭により宴会がはじまり、卒業年度、学科に関わらず、学生のころの思い出、お互いの現況報告等で話しに華が咲き、また、M科卒業生が懐かしい母校の学生服を着て応援歌の大合唱となり、大いに盛り上がりました。懇親会での話題は、今年の秋に開催される母校創立100周年記念行事の件でした。浪速工業会としてどのように対応するのかまだ未定ですが、OBとして何がしかの協力をするようになるかと思えます。会員各位にご協力をお願いすることになりましたらよろしくお願ひします。また現在、在校生のクラブ活動で合宿の際には、教室で泊まっているそうです。浪速工業会館が建て替えられれば会館を利用したいとのことで関東支部会員の方々にも寄付金のご協力をお願いしたいとのことでした。



H19.3.10~11東西合同懇親会にて



母校空襲罹災の記



M21 金田 龍之介

(昭和二十年六月七日)
「四十四年目の役者」より抄録

M21スウォッチからの続き

大阪駅に降り立った私は、気を取り直して
勤務員先の大丸の工場へ行くことにしてリニッ
クサックをかつぎ上げた。リニクサックは、
当時は生活必需品で、その中には世帯道具から
食糧の米や小麦粉やシヤケ缶や着替えの下着
類、腹巻からヨーチンまで入っていた。大阪へ
一人で帰って行く私の母の心づかいがこもっ
ていた。この時代は勤務員をどんなことがあつ
ても休んではならない。それが我が学徒の唯一
の御国のための御奉公だと、心の底から信じこ
んでいた十七歳の中学生だったから、母の心配
などは気にもしないで、帰って来たのであつた。
大丸の工場へ行くとみんな相変わらず、油に
まみれて働いていた。知覧や川本もすぐ別のね
ぐらを見つけていた。結局、私は工場の特設寮
へ入れてもらうことになった。六月七日の空襲
で罹災した級友の山口君と一緒にその寮へ行っ
て見ると、焼け跡に残った小学校で、教室の床
にフェルトが敷きつめてあって、学生達がめい
めいの手荷物を並べて自分の場所を決めてい
た。夜になると、寝るより仕方がない。寝転がっ
てみると、フェルトがチクチクと肌をさした。
夏に向かつて蒸し暑くて寝苦しく、眠れたもの
ではない。校庭に出て歩いてみると、隅の方に
小さな井戸があつた。藤棚が焼けないでくすん
で残っていた。この一隅の場所はとても気に入っ
て朝晩よく歩いて来た。

井戸は昔通りにあつた。

昭和二十年の六月の夜に戻ろう。フェルトの
床にごろ寝をして、大阪商大の学生とひと側へ
だてて我々中学生が並んで寝ていたが、ある夜
中のこと、故郷から、母親に持つて帰らされた
ものであろう(事実、このおふくろも、お腹が
すいたとき食べなはれや、と袋に入れた非常時
用の食糧を持たして帰らせた)が大丸のいり豆
をまわりの連中に気兼ねをしながら、そつと食
べ始めたのがいた。それがバリバリとやらない
で、間をおいてポリリ、ポリリとかむので、周り
の学生は、いやでも耳について、とうとう商大
の方から「あーあ、豆食いたいなあ」と間の抜け
たような太い声が出た。豆の音は、ピタリとや
んだ。警戒警報がまた鳴り出したが、警報のサイ
レンは、我々には関係ないのだという気持ち
で、誰一人、起きてどうこうするという人もな
かった。工場の食堂は、大丸北詰の、地下鉄の出
口を上がった向かいの角のビルにあつた。朝に
なると、その食堂で大きく軟らかくふくらん
だ大豆と、飯粒がまびれついたような「飯を食
べた。お菜は何であつたか、思い出せないが、奇
妙にふやけて、味も素っ気もない大豆ばかりが
頭に残っている。この住友プロペラ工場に来る
前に行っていた久保田鉄工所では、同じ大豆入
りの「飯でもふやけていなくて歯ごたえがあつ
た。久保田名物の鉄板焼きという配給物があつ
たが、これは何の粉かわからないが、ホットケー
キほど、甘くも、ふわつともして、いなくて、何の
具も入っていない、油くさい変てこな、おやつ
であつた。慣れてくると結構食べられた。豆か
すが入るようになって、鯛の辛いかす漬がお菜
に出た。ベークライトの黒い食器の消毒薬くさ
いにおいまで思い出してくる。この食堂は青年
学校の教室であつたが、殺風景な食事を少しで
も楽しくしようとする担任の大河原嘉徳先生が、学
校へ行って、展覧会の時に使う、長い幕を借り

てきて、食堂の汚い部分を全部隠してしまつた。
先生のお供をして阪急百貨店まで行き、地下の
盆栽売場で、立派な松の盆栽を買ひ、桜草のか
わいい鉢も何鉢か求めた。それを、満員の地下
鉄で、先生と二人で、ウンウンといいながら、大
国町まで運んだ。その食堂で、憩いのひととき
を持つた。みんなでかくし芸をしたり、先輩の
話を聞いたり、大河原先生は、バイオリンで、チ
ゴイネルワイゼンを弾かれたが、途中で止め「駄
目だ」とつぶやかれた。みんないっせいに拍手
した。桜草や松の盆栽は、工場の労務課の、日当
りの良い所に置かしてもらつた。須田ちゃん
という十五、六歳のかわいい女事務員さんが、
他の植木と一緒に水をやってくれた。三月十三
日の夕方僕たちが、作業を終了して、隊伍を
整えて工場から帰って行く時、須田ちゃんは、
紺色の少し大きい事務服を着て(和服であつた
から上に羽織つて)お下げ髪にピンク色のリボ
ンを付けた小さな顔でニコニコして桜草の柵
の前で、見送つてくれた。その集合のかかつた
時、あわててゲートルをまいて、帰り支度をし
ていた僕に「あとで水やつといたげるわね」と
言い、僕は「頼むで」と言つて飛んで行つたので
ある。その夜、大空襲があつて、須田ちゃんは死
んだ。「空襲がはげしなつて、焼夷弾がどんど
ん落ちて来るようになった時、あの子が、飛ん
で来よつたんや。こんなとこ来たなら危ないやな
いか、早よ帰らんかい、言うて追い返したんや。
ハイ、言うて帰つて行きよつたんやけど、火に
巻き込まれたんやろなあ」と工場の労務課の人
が話してくれた。毎年桜草の花が街に出まわる
早春の季節になると、思い出すのである。その
焼け跡から大河原先生も出征して行つた。私達
も久保田鉄工所を去つて、一旦学校に帰つた。
大豆「飯から話がだいぶ、他の方へ行つたが、
また昭和二十年七月頃に戻そう。とにかく仕事
といつても私たちは時期はずれに入つて行つ

たのであるから、あまりいい仕事は与えられな
かつたが、私のように久保田でエンジンの組立
てをやり、後になって校務連絡や保健や、監督
の先生の部屋で仕事をしようになつた生徒
は、この新しい工場では不要になり、大丸の地
下工場に粗けずりしたプロペラのリムを、木の
手押し車に積んで、焼け跡の心斎橋通りを南下
し、日本橋五丁目の松坂屋の地下の仕上げ工場
まで運ぶだけの単調な作業をやらされた。その
他には、焼け跡の瓦礫を捨てて整地する作業も
やらされた。手押し車は一日に二、三度、一望に
焼け、筋道だけが残つた心斎橋筋を、相棒と二
人で「ころころ押し行けば、だいたい作業は終
わつた。汚れた作業スポンに、カーキ色の半袖
のシャツ、藁草履などをはき、それに学生帽だ
けはキチンとかぶつていた。
戎橋の右たもとの、焼け残つたビルが国民酒
場になつていた。戦前はワッフルというケーキ
を売つていた店があつた所だ。午後三時頃にな
ると人が並んだ。一緒に手押し車を押していた
守屋博隆という隣のクラスの生徒が、胸のポケッ
トから、一枚の紙切れを大切にうし出して、「ビー
ル券が一枚手に入つたんや、すまんけど、飲ん
でくるわ」といふので、「行つて来いや」と答える
と、「すまんなあ」と、行列のほうへ走つて行つ
た。私は戎橋の中ほどまで車を押して行き、待つ
ていた。彼は行列の後ろに並ぶと、こちらを向
いて、ニヤリと笑い、また、向き直つて列の後を
ついて行つた。(次号へつづく)

「都工50年史」「あんない

事務局より

A13卒 奥山 清治朗氏(元建築科教諭)の
「都工50年史」私の「都工史」を希望の会
員は、事務局へご連絡下さい。メールでの
送信の場合は無料で、郵送の場合は郵送料
実費にてお送りいたします。



# マスターズ10年連続 出場で受賞

E36 馬江 治喜



母校の先輩(普通科29年卒)で、メルボルンオリンピック大会の水泳選手として出場され、現在社団法人日本水泳マスターズ協会副会長である長谷景治様より、昨年7月15日(土)東京辰巳国際プールにて、ジャパンマスターズ10年連続出場の表彰を戴きました。私の人生に於いてこんなに感激した事は今までにはありません。大先輩の長谷様との記念写真とともに一生の記念として残る事と思います。競技の種目は、クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ、個人メドレーとあり、マスターズ大会ではそれらの種目で、距離、性別、年齢5歳ごとに区別して表彰をしていただけます。(リレー除く) 恥ずかしながら私のタイム記録は、いつも底辺でうろうろしている状況です。そこで出来るだけ同じ水泳大会へ毎年連続出場をしてみようと思いい、今回ジャパンマスターズという大きな大会でやっとな連続出場が達成でき表彰をして頂く事が出来ました。これからも一段と健康に気をつけ、出来れば100歳まで現役スイマーとして日本全国、出来れば世界の大会で泳いでみたいと思っております。(私はマスターズ協会へ100歳登録をしております)もし浪速工業会会員で、マスターズ大会へ出場の経験又は予定されている方がおられるましたら、ご面倒でも関東支部事務局馬江迄ご連絡頂ければ幸いです。

今年4月15日(日)仙台のマスターズ水泳大会に参加し、同年代の100mと200mの自由形で金メダルを頂きました。しかし長谷様より表彰を頂ける成績ではありませんでしたが、いっつか長谷様より表彰を頂ける様に頑張りたいと思っております。

# 浪速工業会関東支部 総会に参加して

E44 亀田 光郎



一月二十七日、関東支部総会に初めて参加させて頂きました。会社の転勤で二年余り前に名古屋から東京に移ってきました。Mニュースをメールで頂く様になり、先輩方の昔話を面白く読ませて頂いております。総会には、会場の「鳩山記念館」に興味をそそられた事もあり、一度顔を出してみようと思いました。

私は、親子二代、都工電気科にお世話になっております。父は、昭和八年の卒業で亡くなるまで、ほとんど毎年「電八会」と称してクラス会を続けておりました。精研の木内さん、大阪電機機工の杉浦さん等、同級の方々は、浪速工業会の活動には大変ご熱心でした。

第一部の総会は手際よく進められ、名簿や資料も良くまとめられており初参加の私にも、前年度の活動の内容や、今回どのような方が参加しておられるのか良く分かりました。

大阪から濹合理事長と秋山校長がおみえでした。秋山校長から母校の現況報告がありましたが、若くて行動的な校長のリードの元、母校は今も健全であるとの印象を受けました。

私は、在学中には「歴史、伝統とか「都工の誇り」とか言われると、それは過去のものだろう」と反発していましたが、世に出て見ると、そういうものが一朝一夕には成らないものだということが良く分かります。母校が今年、百年を迎えますが、創立以来先輩方の努力の積み重ねがあり、都工の校風というものを、築きあげて来たと思えます。敗戦後、占領軍による教育改

革があり日本の歴史、文化が分断されるという事がありました。新制の工業高校になっても、我、母校はよく、良き伝統を保ち続ける事が出来たものだと思います。公立工高でありながら独特の気風を保っているのは、学校の教育に、直接、間接的に関わって来られた先輩たちと浪速工業会の活動の賜物であると思えます。

また、関東支部においてもこのように、立派に活躍しておられる先輩方にお会いでき、有意義なひと時を過ごし得ましたこと、お話しいただいた幹事の方々に感謝いたします。



H19.1.27 関東浪速工業会総会 (文京区音羽・鳩山会館にて)

# シルク・ロード 天山北路を往く(第2回)

A27 田中 瑛也

## ●高僧達が遺した仏教伝来の道

シルク・ロードが、開発された行為は、漢民族を主体とする中国人の国土防衛と領土拡張の矛盾する問題を因として生じた。と同時に中国の都市は、市壁に囲まれた息も詰まる様な閉鎖的空間に、儒教の倫理を尊ぶ社会の拘束された暮らしの中に生きる人々は、西方には拓かれた世界があるとの思いから、後世西欧人が持つ東に対する憧れオリエンタリズムに対比すべき西に対する憧れオキシデンタリズムとも呼ぶ人々も存在した。晋末期の詩人が著した「桃源境」に「最初は道が狭

い。さらに数十歩歩くと、明るく開けた。人々は種蒔き耕作に励む。男女の服装は、全て中国人でないようである。老若男女みんなにこにこ生活をたのしんでいる。二期をほぼ一にして北方諸国との抗争を繰り返す中国に、仏教の教えが伝わった。仏教は最初北方民族のもたらした教えではあるが、やがて儒教の説く現世のきまりに拘りから逃れて、この世ならぬあの世の浄土信仰を抱く庶民も多くなった。

## 高昌故城(写真1、2)

ベゼクリク千仏洞で知られるトルファンにある高昌故城は、玄奘三蔵がインドへの経典を求めての旅の途上、仏教を篤く信仰する国王鞠文泰に請われて、二ヶ月滞在し説法を施した故事で有名である。城の規模は、東西1.5km、南北1.4km、外域内城、宮城で構成されていた。今訪れるも日干し煉瓦を積み上げられた構造物は、大半は崩壊し、仏塔など最近復旧作業で手を加えられた構造物もあり、現場は雑然とした様相を呈する。ただ玄奘法師が説法したと伝えられる講堂は、正方形の平面を立ち上げた壁に、丸い屋根を載せ、ペルシヤ建築の流れが歴然と見てとれる。



シルク・ロード



写真1



写真2



前ページより

白馬塔(写真3)

シルク・ロードの二都市クチャの出身で中国人ではないが、鳩摩羅什(くまらじゆ)なる高僧は「法華経」「阿弥陀経」等の経典をサンスクリット原典から漢訳した業績でその名を世に知られるが、翻訳する経典をインドから中国に運ぶ途上、馬が敦煌で斃れ、その馬の亡骸を当地に弔い、白馬塔なるささやかな塔を建立した。名の「示す」とく、白く陽光に映え、規模は高さ12m、径7m、彼は、禁を犯してインドへ出国したので帰国後唐により捕らえられ、西安で幽閉された。多くの経典を翻訳したのはこの期間に足した彼の業績である。



写真3

大雁塔(写真4)

西安にある数多くの寺院の中でも、慈恩寺は玄奘三蔵(写真5)がインドから持ち帰った経典の保管場所として建立された大雁塔でその名は世に知れる。A・D652年唐の第三代皇帝高宗は文徳皇后の霊を弔うために建立した寺で、境内の中央に建つ大雁塔は、方形の平面、七層からなる高さ64mの経蔵(お経を収めてある蔵)である。この塔に納められたと言われる経典は、玄奘三蔵がインドより運んだサンスクリット語の経典で、この資料を基に帰国後の玄奘は漢文に翻訳することに動しんだ。余談ではあるが現在の塔には、経典類は保管されておらず、他の場所博物館等に移管され現在の塔内は空室になっている。ところで玄奘法師の業績は、「般若心経」をはじめとして、仏教経典の基幹をなす経典の翻訳を行ったことであるが、と



写真4



写真5

りわけ彼の著した「成唯識論」はインドの世親菩薩が詠んだ唯識三十頌に基つき克明に論を展開今日に到るも奈良薬師寺、興福寺を中心として唯識思想布教の源泉となっている。

● 国動乱の歴史を刻む敦煌

陽関(写真6)

シルク・ロードの東の起点とするならば、西に延びる交易路に沿って宿場町、あるいは市場が立ち、東西交易、物資の流通の円滑化に寄与した。そして当時の中国の西域防衛に視点を合わせれば、長安の都市に総司令官が存在し、敦煌は一前線基地と考えられていた。敦煌市外の荒地に遺る関を臨む時、そこに中央よりかり出された防人達の動いていた幻影を見る。「渭城の朝雨 軽塵を潤し 客舎青青 柳色新たなり 君に勸む 更に尽くせ一杯の酒 西のかた 陽関を出ずれば 故人無からん。」唐代の詩人 王維(701-761)の詠んだ「元二の安西に使用するを送る」の一節ではあるが、陽関を越えれば、知人は居ないのだから、一杯飲もう。と杯を交わして別れる状況が目に見え、敦煌南の郊外、沙漠と言うよりは、土漠という表現が適切と思われる荒涼地の中に、観光地ではよく見かけるテーマパークの装いをした館を視界は捉える。その装いを保ってこの周辺で収集した陶器片や、古銭などが並べられてある博物館などのある区画を、通過して館の裏に出て彼方を望むと、小高い丘上に一塊の土塊が見える。これが陽関である。近づくと、土塊と見えた関も、烽火台であることの識別が出来る。烽火は、



写真6

狼煙とも呼ばれ、敵の来襲を見方に告知する役目を果たす。狼から採れる油は煙が高く上がることから用いられたと聞く。いずれにしても中国の辺境地、わびしさだけが襲う。

放宗古城(写真7、8)

陽関の古跡も広大な沙漠に埋没されそうならびしい状況を脳裏に刻んで敦煌への帰路、新装の古城「敦煌」の建物に出会う。放宗古城と呼ばれる市城で囲まれた井上靖原作「敦煌」の映画のセットに手を加えて保存した構造物である。五代王朝期の町の景観を基調として造られた。五代時代のややけばしい装飾の仏教寺院を中心にして、市場、飲酒店など細部に到るまで気を配ったセットで網羅されている。テーマパークとしては、秀逸ではあるが歴史を人工で再現したセットは、厚みがなく陽関での大きな歴史の彼方への思いは、この人工セットの市内徘徊で消された心境に転じた思いで立ち去る。



写真7



写真8

敦煌故城(写真9)

白馬塔に隣接した敷地に残存する旧敦煌城遺跡、中国人は砂を沙と書く。当地にシルク・ロードの郡として都市が築かれた時の城の跡、崩れ果てた城壁は陽関の遺跡と同じく土塊としか見えない。かつては東西718km、南北1132kmの大規模な城であったこととの面影はない。余りにも荒廃した姿を町の片隅に遺す風情に、人々はこの城跡を一つの「強者どもの夢の跡」しか捉えない。



写真9

次号Mニュースへ続く

関東青葦会より 陶芸教室のお知らせ

陶芸教室 2007.9.29 KUNITACHI

恒例の関東青葦会主催「陶芸教室」を今年も陶芸家として活躍されているA46卒柚木寿雄氏のご好意にて開催する事となりました。他科の皆さんの参加も大歓迎です。奮ってご参加下さい。陶芸が初めてという方も、柚木氏とスタッフの方のご指導により楽しんで取り組んでいただけます。開催日時 9月29日(土) 13時より17時30分。終了後懇親会開催

開催場所 国立市「国立自由工房」 会費 7,000円(懇親会費含む) 定員 二十二名(定員になり次第締切) 申込締切 8月31日(金) 申込方法 卒科・年・氏名をFAX又はEメールにてA37森芳信まで

FAX 04-7184-8443 Eメール 3tree-yoshi@jcom.home.ne.jp (集合場所等詳細は申し込み後、案内します)

次号のMニュースは平成19年11月発行予定です。

訃報

Table with 4 columns: ID, Name, Date, and other details. Includes entries for 松尾嘉雄氏, 向田郁夫氏, etc.

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。